

青い玉と銀色のふえ

小川未明

青空文庫

北きたのさびしい海うみのほとりに、なみ子この家いえがありました。ある年とし、まずしい漁師りようしであつたおとうさんがふとした病氣びようきで死ぬと、つづいておかあさんも、そのあとを追おうようにして、なくなつてしまいました。かねて、びんぼうな暮くらしでしたから、むすめのなみ子こにのこされたものは、ただ青い玉あお たまと、銀色ぎんいろのふえだけでありました。

青い玉あお たまは、ずうつと昔むかし、先祖せんぞのだれかが、この海うみべのすなの中からほり出だして、それが代々だいだいいえ家につたわつたのだということでありました。

なにかねがい事ことがあるとき、この青い玉あお たまにむかつて、真心まごころをこめておねがいすると、その心こころが神かみさまに通つうじてかなえられるというので、おかあさんはこの青い玉あお たまを、とてもだいじにしていました。

玉たまはつやつやしていて、深い海うみの色いろのように青黒あおぐろく、どこまで深いのか、底そこが知れぬように、じつと見みつめていると、引き入れられるような氣きがしました。

そして、真心まごころをこめておいのりをする、青い玉あお たまの表おもてに、海うみの上うへをとびさる雲くものよう、いろいろなことが絵えになつてうかんできて、ゆくすえのことをおしえてくれるのでした。

また、あるときは、青い玉がまつかにほのおのようになって見えたり、玉にひびがはいったりして、不安な気持ちをいだかせることもありました。

「これには、ご先祖のたましいがはいっているんです。」といっておかあさんがこの青い玉をだいにしたのも、ふしぎではありません。

おとうさんの持つていた銀色のふえは、その音色を聞くと、さびしいあら海にすさぶあらしのように、なんとなくひとりぼっちの感じを起こさせたり、またあるときは、反対に心を引きたてて、のぞみとよろこびをもたせることもありました。

そして、このふえの音がとどくところ、魚たちがその音をしたってよってくるので、思わぬ大漁がありました。

「まったくふしぎなふえじゃないか。」

「なんにしてもありがたいことだ。」

漁に出た人々は、なみ子のおとうさんの銀色のふえを手にとって、ふしぎそうにながめるのでした。

このふえもやはり、おじいさんのころからつたわっていましたので、これにも先祖のたましいがこもっていると、おとうさんは信じていました。

なみ子は、おとうさんが心をこめて、このふえをふいた日のことをおぼえています。
 その日、海の上には、黒い雲がはびこり、いかにも北の国らしいものすごいけしきでした。

雲の間からいな光がもれ、かみなりが鳴っていました。

「こんな日には、はたはたがとれそうだ。」と、おとうさんはいました。

そして、ひさしぶりに大漁にしてみんなをよろこばせたいと、銀色のふえを持ていきました。

おとうさんが船の上でふえをふくと、たくさんのお魚が、波の上でおどりました。いかやさばも、むれをつくつてよつてきて、思わぬ大漁になりました。

「季節はずれに、こんなにいろいろな魚がとれたのも、みんなふえのおかげだ。」といつて、人々は、浜に帰ってから酒もりを始めました。

そして、人々は、お酒によいながら、おとうさんにそのふえをふいてもらつて、その音色に耳をかたむけていると、またあすのはたらきに新しいのぞみがわき、たとえば、海があられていても、命をかけてはたらき、おたがいになかよくたすけあつていきたいという気持ちになるのです。

いさましく人々の心をうきたてたあのときのふえの音色を、なみ子は、いまでもおぼえていました。

「もう一度、楽しかったあの時分になってみたい。」と、なみ子は思いました。

ある日、青い玉と銀色のふえを持ち出すと、すなはまの上で、おとうさんやおかあさんのことをしのびながら、じいとながめていました。

「この青い玉は、おかあさんがだいじにしていらしたんだわ。ああ、この銀色のふえは、おとうさんが、みんなとお魚をとるときにふいたんだわ。」

なみ子が、海の方を見ながらつぶやいてみると、

「やあ、なみちゃんか。そんなところでなにをしているな。」と、そこを通りかかったおじいさんの漁師が声をかけました。

「海の夕日が、こんなに赤くうつるのは、おじいさん、おかあさんが、空からあたしを見ていらつしやるのかしら。」

なみ子は、青い玉にうつる美しい夕日をながめていました。

「おつかさんも、おとつあんも、そりやあ、おまえさんをじいっと見まもっててくださいな。早く大きく、りっぱなおとなるのを待ってられるぞ。」と、おじいさんは

こた
答えました。

「おじいさん、いまでもこのふえをふけば、お魚がよってくるかしら。」

なみ子は、こんどは銀色ぎんいろのふえをとり出して聞きました。

おじいさんは、なつかしように、にぶく光るふえをながめていいました。

「そういえば、このごろしけで、魚がすくないんだな。魚がすくないと、ついつまらんことではなかわれがしたり、けんかが起こったりする。おまえのおとつあんはりっぱな漁り師ようしだったから、どんなときでもけんかなどしなかったがな。」

おじいさんは、なみ子のおとうさんを思い出してほめました。

「おじいさん、このふえをかけてあげましょう。よくふいて、たくさん、お魚をとってください。」

なみ子は、だいじなふえをさしました。

「ありがとう。おとうさんのかたみのふえをかりていいのかい。」

「魚がたくさんとれて、このはまの人たちがなかなくなれたら、おとうさんもきつとよろこんでくださるわ。」と、なみ子は心から答えたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「たのしい三年生」

1957（昭和32）年1月

初出：「たのしい三年生」

1957（昭和32）年1月

※表題は底本では、「青《あお》い玉《たま》と銀色《ぎんいろ》のふえ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い玉と銀色のふえ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>